

## 地蔵寺過去帳による華岡青洲の 乳癌手術患者三名の死亡年月日

松 木 明 知

はじめに

華岡青洲(三代隨賢)<sup>(1)(4)</sup>の業績は何といつても麻沸散投与による全身麻酔下で、それまで不可能であつた多種の手術を施行したことであることに異論はないであろう。就中青洲が関心を寄せたのは乳癌ないし乳房腫瘍に対する手術であり、だからこそ麻沸散投与による最初の症例は、五条駅の藍屋利兵衛の母かんに対する乳癌の手術であつたことは<sup>(5)(7)</sup>、広く人口に膾炙している。

青洲が手術を行つたと思われる乳癌患者については、呉秀三の著書<sup>(1)</sup>や森慶三らの著書<sup>(2)</sup>に収録する所の「乳巖姓名録」(以下「姓名録」)によつても知られる。なお右の「姓名録」とは多少異なつた和歌山医科大学に保存される「乳岩姓名録」の存在が知られており、現在筆者が検討中であるが、本稿では呉の著書<sup>(1)</sup>の「乳巖姓名録」に準拠して論を進める。

右の姓名録に記載されている年月日<sup>(5)(8)</sup>が必ずしも正確に手術日を意味するものでないことは、第一例目の藍屋利兵衛の母かんの場合にも当てはまるが、もう一つ関心を寄せなければならないのは、これらの患者が術後どれくらい経つてから死亡したかである。

これまでで一五〇名余の手術を受けた乳癌患者の中で、その死亡年月日が特定出来たのは、筆者の研究によるわずか二名に過ぎなかった。このことはこの種の研究がいかに困難を極めるかを如実に物語っている。事実一九九七年九月下旬、筆者は香川県小豆島に数日間滞在し、小豆島出身で青洲に乳癌の手術を受けた三名(計四回の手術)について鋭意調査したが、徒勞に終わった。

今回以前から探し求めていた和歌山県那賀町の地蔵寺の過去帳を披見する機会を得、それによつて新たに三名の患者の死亡年月日を確定できたので報告する。

## 二、地蔵寺の過去帳に披見される三名の患者

地蔵寺は青洲旧宅さらには華岡家の塋域に近い西野山共同墓地にあり、現在は無住となっている。最近那賀町西野山地区の集会所が寺に向つて右手に新たに建てられ、地蔵寺とは廊下で結ばれている。無住となつたため地蔵寺の過去帳は現在同じ宗派の粉河町馬宿(うまよど)の西光寺森大耕師の管理するところとなつている。筆者是那賀町教育委員会の御協力と藤田師の御好意によつて右の過去帳を調査する機会に恵まれた。

「過去帳 名手庄 西之山邑」と題する過去帳は二冊あり、巻一は凡慶安年代から享和年代まで、巻二は大略寛政年代から明治初年に至る法名を記載している。両巻共、各家系毎に記載されているが、巻二の末尾欄外に写真1に示すように「この人たちは華岡医院に入院」と後の時代になつて墨書されたと考えられる記述があり、その上の欄内に十四人の法名、歿年月日、俗名などが披見される。それとは別に写真2、3、に示すように二枚の張り紙が付されており、上の張り紙には六名、下の張り紙にも六名の法名、歿年月日、住所、俗名などが記されている。

まず第一枚目の張り紙(写真2)の二人目は次の通りである。



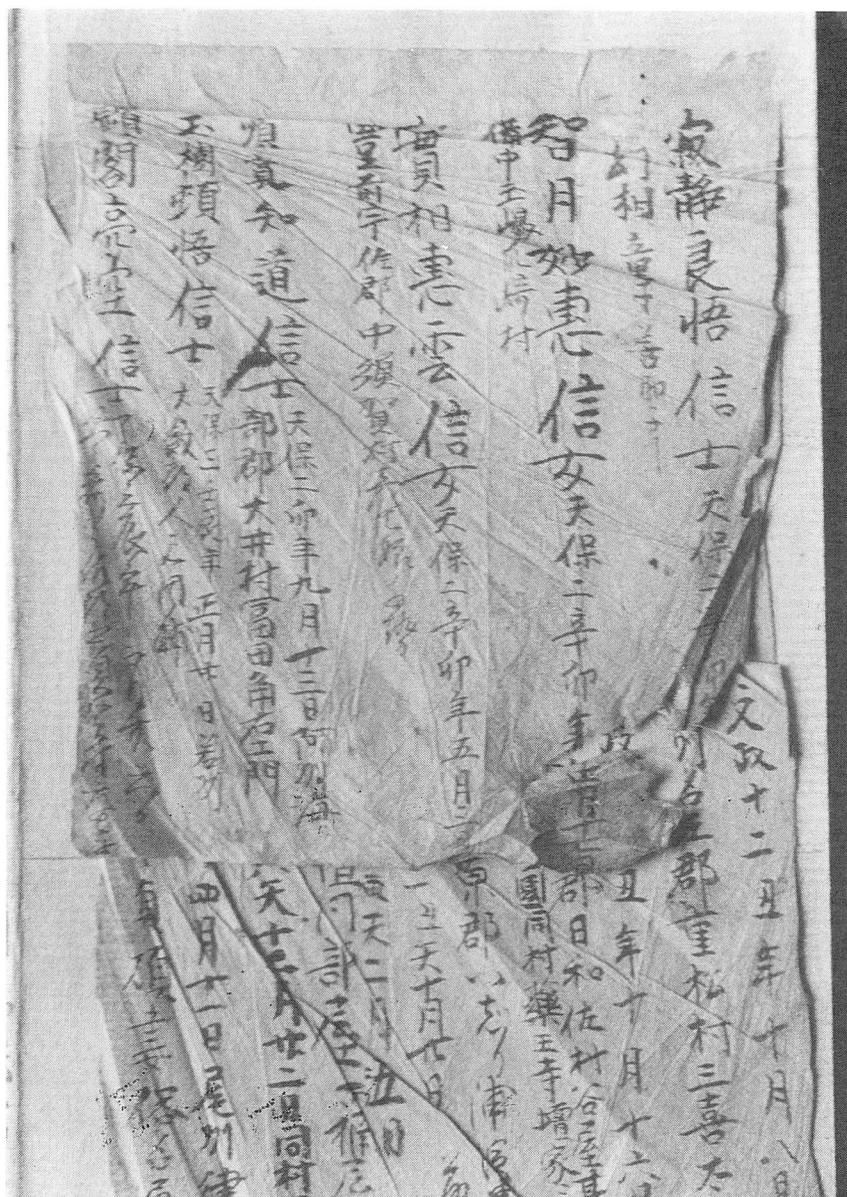
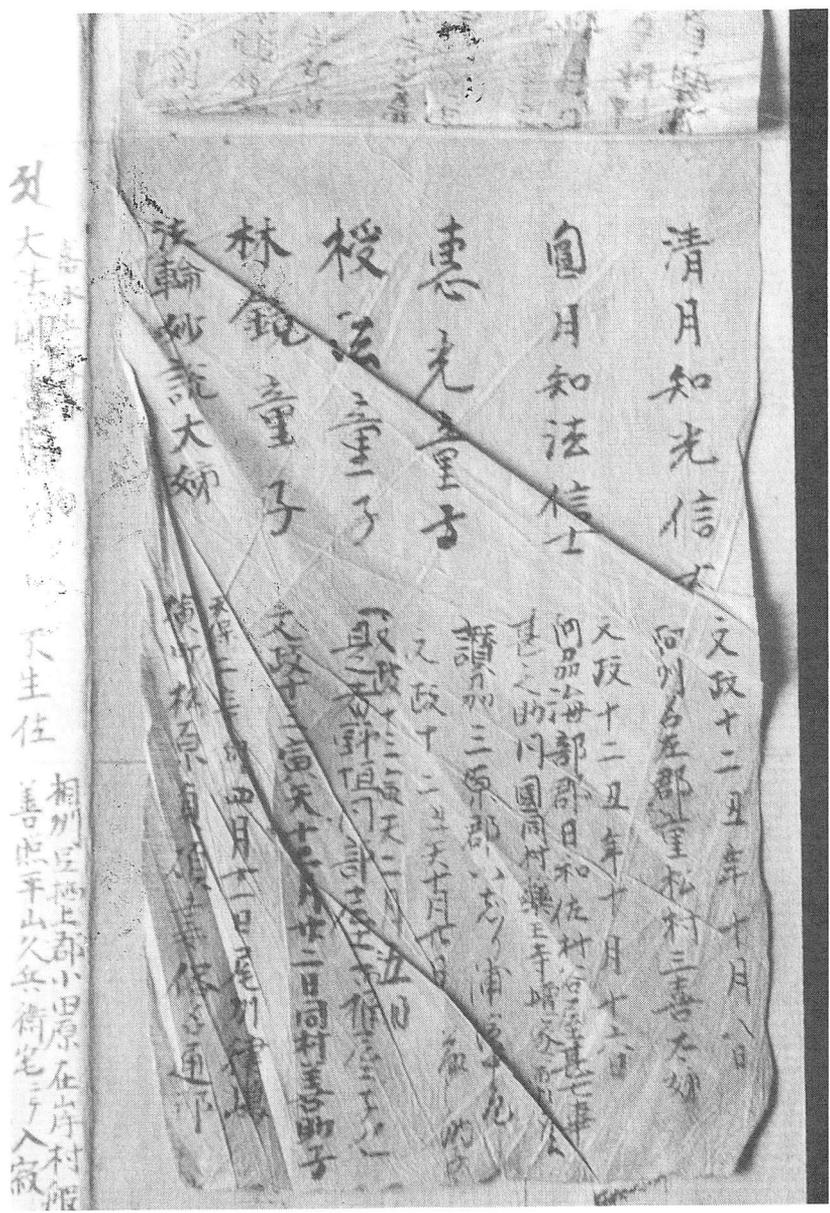


写真 2 張り札 1 枚目



列  
大  
下生住  
相州豆柄上郡小田原在岸村館  
善照平山久兵衛宅入寂

写真 3 張り札 2 枚目

智月妙恵信女 天保二辛卯年四月十七日

備中玉嶋爪崎村

この人物は呉の著書<sup>〔1〕</sup>に収録する所の「乳巖姓名録」の中、末尾から十四人目の「天保二歳四月九日ニ来ル 備中浅口郡玉嶋村 爪崎吉助妻(行年三十九歳)」と同一人物である。過去帳には「浅口郡」は記されておらず、また氏名、年齢の記述もない。さらに「乳巖姓名録」に見られる「玉嶋村」の「爪崎吉助」の妻であることも記述がなく、過去帳には単に誤って「玉嶋爪崎村」と地名のみ記されている。これは、地藏寺の住職が「玉嶋村」の「爪崎吉助」を過去帳の記載のように聞いて記入したためであろう。それは死亡者が地元の間人でなく、遠く「備中」という遠隔地から来た患者であったためと思われる。「乳癌患者」であつて、過去帳の「信女」と一致することを考慮すれば十分に理解されるところである。二枚目の張り紙の第一番目には次の通り記されている。

清月知光信女 文政十二年丑十月八日

阿州名庄郡重松村 三喜太姉

「乳巖姓名録」の末尾から十七番目には次のような記述が見られる。

文政十二年九月晦日(附落) 阿州名西郡茂

松村 三木太妹(核重 三錢五厘)

「過去帳」と「乳巖姓名録」の記述は、前者では住所が「名庄郡」、氏名が「三喜太姉」となっているのに対して、後者では各々「名西郡」、「三木太妹」となっている。「庄」と「西」、「姉」と「妹」と両者に違いがあるものの同一人物と見て間違いない。なお郡名に関しては正しくは「名西郡」である。

同じく二枚目の張り紙の末尾には次のようになる。

法輪妙説大姉 天保二辛卯年四月十一日

尾州律嶋横町 松原貞碩妻 俗名通那

この人物は「乳巖姓名録」の末尾から十八番目の「文政十三庚寅年三月二日 尾州津島 松原定碩 妻（行年三十四。核量九錢五厘）」とある人物と見て差し支えない。「乳巖姓名録」中の「津嶋」は「律嶋」、「定碩」は「貞碩」となっているものの、これまた単純な誤記と見て差し支えあるまい。名前に關しては、あるいはむしろ過去帳の記載の方が正しいかも知れないが、いずれかが正しいかは不明である。しかし過去帳によつて俗名が「通那」（つな）と判明したことは収穫である。

以上の三名は歿年月日から考えても青洲の歿した天保六年（一八三五）以前であり、青洲に直接手術を受けたか、例え間接的であつても、青洲に手術を受けた可能性は極めて高いと考えられる。

### 三、手術施行から死亡までの期間

「乳巖姓名録」の日付は、必ずしも手術日でないことは前述した通りであるが、手術から死亡までの期間は、これまで判明していた二名については、藍屋かんの約四ヶ月、文化六年（一八〇九）五月二十四日に手術を受けたと思われる勝股元碩の妻（文化九年六月二十三日歿）は約三年である。もし仮に「乳巖姓名録」にある日を手術日と仮定した場合、死亡までの期間は、三喜（木）太姉（妹）の場合、文政十二年（二八二九）九月晦日から同年十月八日までの一ヶ月と八日、松原貞（定）碩の妻の場合は文政十三年（一八三〇）三月二日から天保二年（一八三一）四月十一日までの一年一ヶ月と九日、吉助の妻の場合は、天保二年（一八三一）四月九日から同年四月十一日とわずか二日である。

とくに最後の吉助の妻の場合「乳巖姓名録」には「四月九日ニ来ル」とあつて、この日が初診日であることは間違いないが、二日後の翌十一日に死亡していることから考えると、手術を受けたものの全身麻酔から覚醒しないで死亡した可能性が高い。恐らく極めて進行した乳癌のため、敢えて緊急的に手術を行わなければならなかったことも考えられるが、「乳巖姓名録」の「文政九壬申年四月十四日 備中倉敷庄 太八妻」の部の張札に「天保二年四月九日。同国浅口郡玉島村 吉助ト云者之妻 患ニ乳岩。来テ治ラ乞フ。先生ニ語ル。曰『此太八ナル者之妻乳岩根治。而今ニ至テ強壯ニ在ス』ト云ヘリ。実ニ奇哉」とある。この記録を読む限り、進行した乳癌で即刻手術を施行しなければならない状態ではあつたものの、「先生ニ語ル」と言う文面からは患者が元気に「太八妻」の健在であることを青洲に伝えており、このことは取りもなおさず、吉助の妻の全身状態が非常に悪かつた訳ではないことが推察される。そうとすれば、四月九日に初診を受け、翌十日に手術を受けたものの、全身状態が悪化して、全身麻酔から覚醒しないまま翌十一日に死亡した可能性が高い。

#### 四、おわりに

和歌山県那賀町の地藏寺の過去帳を調査した結果、「乳巖姓名録」に記されている患者の中「松原定碩 妻」、「三木太妹」と「爪崎吉助 妻」の三人の歿年月日が確定した。これによって青洲らによって乳癌手術を受けた患者一五〇余名の中、死亡年月日が確定したのは五名となつた。

#### 文献

- (1) 呉秀三『華岡青洲光生及其外科』吐鳳堂、東京、一九二三（大正十二年）
- (2) 森慶三、市原硬、竹林弘編『医聖華岡青洲』医聖華岡青洲顕彰会、和歌山市、一九五四（昭和三十九年）
- (3) 南圭三『華岡青洲』和歌山県那賀町、一九七三（昭和四十七年）

(4) 松本明知「近代麻醉科学を創った華岡青洲―痛みとの闘いの歩み―」『日経メディカル』臨時増刊号、一二〇～一二三頁、一九九三(平成五年)

(5) 松本明知「華岡青洲と藍屋利兵衛の母」『日本医事新報』二四六七号、一二〇頁一九七二(昭和四六年)

(6) 松本明知「華岡青洲と全麻下乳癌手術の期日」『麻酔』二二卷三号、三〇〇～三〇一頁、一九七三年(昭和四七年)

(7) Matsuki A : The Correct date of the first general anesthesia by S. Hanauka. *Anesthesiology* 39 : 565, 1973

(8) 宗田一「華岡青洲の乳ガン手術記録について」『科学医学資料研究』四五号、四～五頁、一九七七年(昭和五二年)

(9) 松本明知「藍屋佐兵衛の妻と勝股元碩の妻―青洲の乳癌患者について―」『日本医学雑誌』四一卷二号、二二二～二二三頁、一九九五(平成七年)

(10) 筆者は災害、戦災などの被害が少ない香川県小豆島に注目した。青洲に治療を受けた患者は左に記すように三人いる。

文化七年 讃州小豆島見目村

平野屋平七内

文化八年 閏二月一二日 讃州小豆島

平野屋平七内

文化十一年九月八日 讃州小豆島

橘村清左衛門内

文化十二年六月五日 讃州小豆島宝村

長太夫妻

しかし菩提寺が特定出来ないことや特定できても過去帳が焼失したり紛失したりしているため、右の四件三人の患者の死亡年月日は不明である。但し平野屋平七の妻は現在の小豆島見目村歡喜寺の過去帳には披見されず、夫と思われる文化八年九月三十日「心善浄空ミメ平七事」と、娘と思われる「文化十一年八月二十日 ヲテル童女 ミメ平七娘事」の記載があるのみである。

(弘前大学医学部麻醉科)

## The Death Dates of Seishu Hanaoka's Three Patients with Breast Cancer Identified by Jizoji's Burial Records.

by Akitomo MATSUKI

Almost all the death dates of about 150 patients with breast cancer who underwent Seishu Hanaoka's surgical treatment remain unclarified, except for Kan Aiya, who died on Feb 23, 1805 and the wife of Genseki Katsumata, who passed away on June 23, 1812.

In 1997 I made a detailed survey of two volumes of the burial records of Jizoji's temple of Nakacho, Wakayama-prefecture and found the posthumous names and death dates of three patients whose names are found in "Nyugan-Seimei-Roku" (The Name Lists of Patients with Breast Cancer) in the last page on the volume two. (60)

They are : 1) Mikita's younger sister, who died on Oct. 8, 1829, 2) Teiseki Matsubara's wife, who died on April 12, 1831, and 3) Yoshisuke's wife, who passed away on April 17, 1831. According to these dates, estimated periods between surgery and death were 38 days for Mikita's sister, 1 year 1 month and 9 days for Matsubara's wife and only two days for Yoshisuke's wife.

The death dates of five patients out of about 150 female patients whose names appeared in the "Nyugan-Seimei-Roku" have been confirmed so far.